

絵本の表現構造にみるパラレル・ユニバース

— フックスフーパー『友だちのほしかった大男の話+友だちのほしかったネズミの話』における表現構造の分析 —

趙崢一

はじめに

二〇世紀は科学の進歩によって、時空間に対する認識が大きく変化した時代であった。それにつれて、芸術表現の様相にも激しい変化が見られ、静止画面で時間の推移を表したり、人間の潜在意識を可視化しようとしたり、多様な試みが数多く見られる。この影響は絵本にも及び、様々な表現構造が作家によって表現されている。絵本は保育や児童文学、または児童心理学の領域で研究対象とされることが多いが、本研究では絵本を芸術表現の立場から扱い、絵本の表現構造を新たな手法で分析する。絵本における「時空間」の表現手法に着眼し、「パラレル・ユニバース」という概念を持ち込み、新たな解釈を試みる。「パラレル・ユニバース」という考えは物理領域における一つの解釈問題であり、ヒュー・エベレット三世が一九五七年に発表した博士論文^①の中で提唱した「多世界解釈」を元としている。一般的にはどこかに自分の「分身」が存在するもう一つの「時空間」だと理解されている。パラレル・ユニバースは、日常に見られるごく普通の選択行為により、世界が枝分かれすることによって現れる。このように考えれば、人々を瞬時に世界のいわゆる「中心」(centrality)、あるいは「優位」(supremacy)という立場から追い出し、世界に対するより客観的な見方と、「他者」の存在を再認識させる。

絵本における時間表現には特殊性が見られる。書物メディアである絵本の場合、ページを捲るという行為が伴われることによって、読者自身も物語の構造の一部であると考えられる。他方、絵本は「絵」と「言葉」両方の働きで構成されるため、他の書物メディアと比べ、「絵」の展開による独特な「時間の流れ」が生じる。それゆえ、「平行関係」あるいは「並行関係」を認識するため、「読書」という行為の中で読者は「参加者」や「観察者」、または「思考者」な

どのさまざまな立場、または立場の転換が見られる。本研究における「パラレル・ユニバース」による分析では、絵本における時間の表現手法を再認識させ、絵本のメディア特性をより明確化することが期待できる。他方、絵本に対しての理解もより深くなることも考えられる。

筆者はいままで、「パラレル・ユニバース」が見られる絵本を何冊か収集し、それらの表現構造を分析した。その中で、フックスフーパー『友だちのほしかった大男とこの話+友だちのほしかったネズミの話』^②には「平行関係」と「並行関係」が表現される好例であるため、今回の事例として分析を行うことにする。以降ではまず本論で使われる用語の再定義を論述してから、この絵本における「平行関係」あるいは「並行関係」の考察を進め、時間軸の構造を分析する。また、時間軸の分析によって、絵本と読者との関係についても論考をしていきたい。

一、用語の再定義

(一) 時間軸

「時間」という言葉には多様な意味が含まれ、異なる分野においても様々な解釈がある。本研究では辞書による「物理系の現象の経過を記述するため導入する量」^③に基づいて、本研究における「時間」という言葉を定義していく。絵本における物語を「物理系の現象」に相当すること、物語の流れを「現象の経過」に相当することにする。また、物語の開始を「時間」のスタート、物語の終結を「時間」のフィニッシュにし、スタートからフィニッシュまでの経過を時間の一単位とする。

「軸」に関して、辞書に記載される解釈の一つは「巻物の中心にする丸い棒。特に掛け物や巻物の中心にする丸い棒」^④である。絵本での登場人物を「丸い棒」と考え、「丸い棒」が転げまわっていくと、「巻物」に相当する物語の画面が次第に展開していく。なお、軸の断面を「点」と捉えて鳥瞰すると、「点」の動きによって、物語の展開、すなわち「物語の時間軸」を見渡せる。

(二) 平行と並行

辞書によると、「パラレル」は「平行」あるいは「並行」^⑤であり、ワールドは「世界」である。それゆえ、「パラレル・ユニバース」とは「平行世界」あ



図1 『友だちのほしかった大おとこの話+友だちのほしかったネズミの話』

るいは「並行世界」であるのだ。『広辞苑』では「平行」と「並行」が類語だとし、前者の意味を「①同一平面上の二直線（あるいは空間の二平面または一直線と一平面）がどこまで延長しても交わらないこと。②並行と同じ」⁶⁾と解釈し、後者の意味を「ならびいくこと。また、ならび行われること」と解釈している。また、『角川類語新辞典』における解釈は「並んでいくこと。二つの事柄を同時に行うこと」⁷⁾と解釈している。語義から考えてみれば、「平行」は主に幾何学的な意味が含まれ、視覚的な二次元イメージが感じられる。それにひきかえ、「並行」の意味には「事柄」という言葉が入り、微妙なニュアンスがある。『広辞苑』は「事柄」の意味を「事の内容。事の模様」⁸⁾と記載している。したがって、「並行」という言葉は視覚的な二次元イメージを超え、三次元もしくは四次元に至り、より複雑な事情の発展であると考えられる。

本研究では以上の語義に基づいて、「平行」という言葉を幾何学的な視覚イメージを表すこと、絵本に見られる多時間軸の関係を検討する際に使うことにする。一方「並行」という言葉は絵本の物語の内容における関係を表すこと、同時に行うまたは二つ以上の物語の内容的な関係を表すことにする。

二、事例分析——フックスーパー『友だちのほしかった大おとこの話+友だちのほしかったネズミの話』の表現構造

本章では事例における表現構造の分析を行う。絵本に見られる「並行関係」と「平行関係」の違いを明確にし、そこで見られる多時間軸構造を分析する。最後には読者の時間軸と絵本自体の時間軸の関係を一つの問題点として検討する。

(一) 内容紹介

森の中に大男とネズミが住んでいた。大男の名前はバルトロ。力が強く、足も手も、口ひげまで「ほうき」のように大きい。とても臆病で、色々な動物をこわがる。それにひきかえ、ネズミは体が小さいし、力も弱い。勇敢で、敵にもくわしく、知恵がある存在なのだ。会ったことのない二人は同じ悩みを抱えている。それは二人とも友達ができにくいことなのである。大男は度胸が小さすぎるため、何に会っても、怖くてすぐ逃げていく。また、ネズミは勇敢であるからこそ、他のネズミたちから排斥されて、毎日ひとりぼっちの生活を送っている。ある日、大男は森でクロウタドリに挨拶しようと思っていたが、相手は自分の卵が取られると思って、震え上がってしまった。大男は自分の目がつかれるかと思ひ込み、走って逃げた。森の草原に着き、横になって、目をつむっていると、友達探しの旅に疲れたネズミがちょうど西の森からやってきて、大男の手のひらで一休みをした。二人は初めて出会ったのだ。

(二) 表現構造の分析

①時間軸の構造——装丁手法による時間軸のイメージ

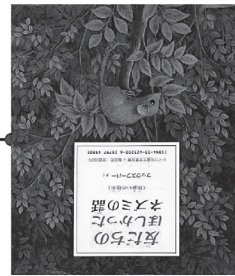
この問題点を論述する前にまず「絵本自体の時間軸」という言葉を提示したい。「絵本自体の時間軸」とは絵本自体をひとつの「宇宙」とし、この「宇宙」を一つの範囲に限り、範囲内の出来事、すなわち絵本を開き、最初の物語が始まる時点から全ての物語が終わるまでを一つの時間軸と定義する。その中には多数の物語の別々の主人公が持っている時間軸が含まれ、それらが絵本の全体的な「時間軸」を構成している。

一般的には、一冊の絵本にはただ一つの物語が表現されるため、「絵本自体の時間軸」と物語の時間軸が重なり合っていると考えられる。しかし、この絵

大おとこの時間軸の方向



共用エンディング（第七見開き）

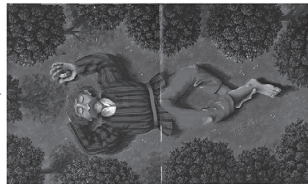


ネズミの時間軸の方向

ネズミの時間軸の方向



共用エンディング（第七見開き）



大おとこの時間軸の方向

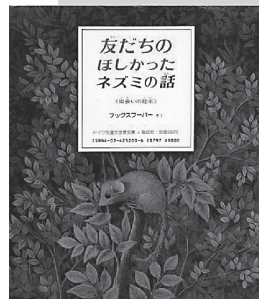
図2 装丁手法による時間軸のイメージ

本には二つの物語が存在するため、絵本自体の時間軸は二つの物語の時間軸で組み立てられている。二つの物語とも「森」で発生し、「森」は全ての出来事の一つの「空間」になり、それぞれの時間軸と場所の「森」で其々の世界が建てあげているのだ。その上、二つの物語は実際一つの物語として存在して、ただ各目の「時間軸」が異なっているため、「二つ」という「外見」ができていてのではないかと考えられる。本論では、このような観点をを用い、大男が持っている時間軸を自分の一つの世界にし、また、ネズミが持っている時間軸はも



大おとこの物語の時間軸の方向

絵本自体の時間軸



ネズミの物語の時間軸の方向

読者の時間軸

図3 絵本自体の時間軸の構造（読者時間軸を含め）

う一つの世界を創り出し、二つの時間軸がこの絵本の「ユニバース」に存在しているのであることになるのだ。
この絵本には特別な装丁手法が用いられ、普通の絵本と異なり、表紙が二つあるのだ。その上、二つの表紙の天地が逆になっている。もし読者が大男の物語を先に読むことにしたら、ネズミの表紙が右綴じになり、ネズミの物語の進行方向も左になっている。大男の物語を読みきり、絵本を反転し、ネズミの物語を読み始めると、大男の物語の進行方向が左になっている。絵本のちょうど真ん中には二つの物語に共用の見開きが見られ、共用のエンディングとして使われている。ただ、読む順番により、見開きの方向も異なっているのだ。（図2）

図2のような時間軸の表現の仕方はただ装丁手法の仕方に即した絵本を手にする時点の視覚的なイメージで、ここには「読者の時間軸」がまだ含まれていない。「読者の時間軸」とは、読者が絵本を開いた時点から全ての物語を読む切るまでの時間の経過を単位としている。実際にこの絵本を読む場合なら、二つの表紙が天地逆の形になっているおかげで、読者は何れの表紙を手にする時点でも左綴じの本になり、物語の進行も全て右に向かうのである。従って、「絵本自体の時間軸」の進行方向も右になるのだ。読み手の時間軸も含め、この絵本の時間軸の構造は図3のようになる。

最初に読む物語によって、もう一人の主人公の視点がなくなっていく。もし大男の物語を最初に読んだら、ネズミの視点が描かれていないことになる。読み手は最初に一つの視点から読み始め、一番目の物語を読み切ったら、次にもう一つの視点へと移動する。その場で、もう一つの視点へ移動することによって、視覚の移動過程が形成されている。通常、この視覚移動の過程は物語の流れを断裂させるかもしれないが、この絵本ではこのような状況が起きない。その原因の一つは読むことを妨げないように真ん中で描かれている見開きで、もう一つは二つの物語の内容と場面展開の呼应性のおかげである。一つの物語を読み切ってから、もう一つの物語を読み始めていくと内容の呼应性が次第に強く感じられる。さらに、前と後ろの二つの見返しではそれぞれに大きい足跡と小さい足跡が描かれ、これは作家が読み手に主人公のイメージを持たせる工夫である。

②「並行関係」と「平行関係」に対する考察

本節では二つの物語における「並行関係」と「平行関係」を中心に論述することにする。『友だちのほしかった大男の話+友だちのほしかったネズミの話』には「並行関係」あるいは「平行関係」が確かに存在していると考えられるが、それらが最初から成立しているわけではない。なぜなら、どこから「並行関係」あるいは「平行関係」が成立し始めるのかも一つの問題点として、以降で述べていきたい。また、それらの関係が成立した上で、二つの物語における全体的な時間軸の構造も述べることにする。ここでは、二つの物語を第一見開きから第四見開きまでと、第五見開きから第七見開きまでに分けて論述していく。

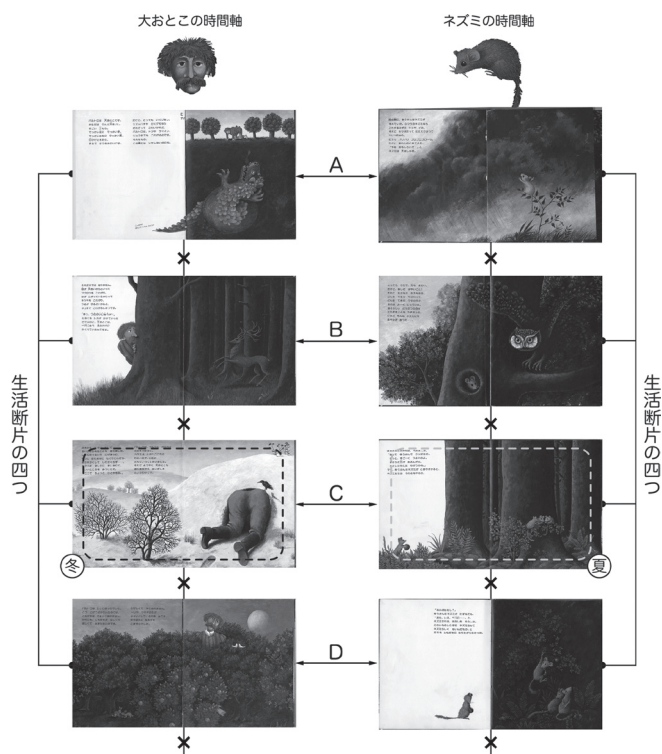


図4 第一見開きから第四見開きにおける時間軸の構造

i 第一見開きから第四見開きに対する考察

第一見開きで、大男は地面に跪き、両手で上半身を支えていて、地面の下に何かがあるのを疑っている様子だ。左ページに書かれた文章「(前略) バルトロは、トラや／ライオン、リュウまでも／こわがるのです。そんなもの、この森にはいやしないのにね。」により、地面の下にリュウは大男のただの空想にすぎない。ネズミの物語の場合はネズミが草の枝に座っており、酷い嵐にも恐れず、かえって「おもしろい」と大はしゃぎをする。この二つの極端な場面では、二人の度胸が描きだされている。大男は非常に臆病で、自分の空想の産物まで恐がっているが、それにひきかえ、現実の酷い嵐は恐ろしいものだが、勇敢なネズミにとってはおもしろいことなのだ。この「空想」と「現実」の呼应によって、二人の性格がそれぞれに浮かびあがるのだ。(図4・A)

それぞれの第二見開きで二人が隠されている姿が描かれる。左ページで書かれている文章により、大男は鹿を恐い角怪獣だと思ひ込み、一日中木のかげに隠れている。ネズミは命を守るため、木の穴に隠れており、敵のフクロウの目

線を避けている。両方とも本能的な行為だが、大男の行為は滑稽で、ネズミの行為は賢い。この喜劇的ギャップを通して、二人の性格の特徴を強調させている。この見開きは「敵」への対処法の呼応だと考えられる。(図4・B)

第三見開きでは第三者の言葉から二人の度胸が再び強調されている。大男はカラスを「ぶきみなくらいトリ」と思い、追いかけられ、ほらあなに逃げ込み、頭だけを隠し、ダチョウのように怯えた。勇敢なネズミは他のネズミの話題になった。「なんて／ゆうかんで／りっぱなの。きつと、すごーく／つよいのよ。まほうの力が／あるんだわ。わたしたちとは／ちがうわね。」とみんなが言う。大男の場合、小さいカラスさえ、大男を恐がらず、偉そうにしながら、大男のお尻を休憩の場所として勝手に使う。また、勇敢なネズミの場合は自分の同類まで自分のことを誤解し、排斥されている。この見開きは第三者の言葉で主人公の度胸を強調することによる対応だと考えられる。(図4・C)

第四見開きではそれぞれの孤独の姿が描かれている。大男は月の光に照らされ、他の仲良くしている動物を見て、つい涙を零した画面の中で、ウサギとトリはどちらも友達と一緒にいる姿が描かれている。一方、ネズミは噂をしているネズミたちの談話に入ろうとすると、みんなは知らんふりをして、話をそらした。また、ネズミも一人で、他のネズミの群れから離れているところ立っている。画面の外に置かれたネズミはやはり他のネズミの世界にはどうも入れないようだ。この二つの場面は孤独の姿による呼応だと考えられる。(図4・D)

以上のように、二つの物語の内容は呼応していると考えられるが、内容的な「並行関係」と視覚的な「平行関係」は成立していない。二つの物語がいずれの場合もただ主人公の過去の生活場面の断片が描かれているにすぎず、連続な出来事ではないことが原因である。例えば、大男の物語の第四見開きでは山が全て白く覆われ、木の枝には一枚の葉っぱもない、冬のようなのだ。一方、ネズミの物語の第四見開きでは緑が多く、夏らしさを感じられる。したがって、二つの画面は違う時間に来た事であることが明確になった。第一見開きから第四見開きまでにおける時間軸の構造は下の図のようにある。

これらの場面が描かれている理由は大男とネズミの性格を鮮明に表現するためである。二人の生活はどのぐらい各自の性格で影響を受けているのか、何故「友達探し」の旅に出るのかの答えをそれぞれの生活の断片に潜り、次の視覚的な「時間軸」の「平行関係」と内容的な「並行関係」が発生し始めることの

準備として描かれていると言えるだろう。

ii 第五見開きから第七見開きに対する考察

第五見開きから第七見開きまでは二人の主人公のそれぞれの「友達探し」という旅が描かれている。大男は自分が他の動物に怖がられているのも知らず、クロウタドリと挨拶をしようと思っていたのに、向こうは自分の卵が取られると思って、震え上がってしまった。大男は相手が自分の目をつつこうとすると思ひ込み、顔を覆って、また逃げた。森の草原にたどり着き、ごろりと横になって、目を瞑った。その頃、ネズミは弁当を持ち、友達探しの旅を始め、途中で色々な動物に会ったが、誰でも友達になつてくれなかった。少しがっかりしたが、草原で暖かいベッドを見つけ、「あしたもあることだし」と思い、一休みした。その見つけたベッドは大男の手であり、ここから、二人の新しい物語が始まる。このように、二つの物語とも連続性が見えるようになった。それゆえ、内容的な「並行関係」と視覚的な「平行関係」が認識できるようになり、それとともに、視覚的な「平行時間軸」も見られるようになった。

だが、それらの関係が始まるとはいえず、主人公の二人は同時に草原に着くわけではない。確かに、一見すると二つの物語は同時に終わり、最後の第七見開きで二人の姿と一緒に画面に描かれ、二人の時間軸はその時点で重なり合ったと認識できるが、よく見ると、実際二人の草原に着く時間には「前」(さき)と「後」(あと)の関係がある。それも既に二つの物語の第六見開きの画面に潜んでいるのだ。ネズミの場合なら、第六見開きではネズミと色々な動物に出会う場面が描かれ、右上の文章によると、勇敢なネズミが草原に着いた時に大男もう既に横になっている。(図5)

後の文章「あれ？なんだか／すごく／おおきなゆびで／なでられたような／きがしたけれど……」を読むと、或いは大男の物語の第六見開きの文章を読むと、この「ほかほかのベット」は大男の手のひらに相違ない。そこから見ると、大男は先に草原に着いたようだ。この点のみならず、二人が草原に着く時間の順番も大男の物語の第六見開きの文章で暗示されている。

「そのとき——」の下の行間はわざとスペースが空けられており、時間の経過を表現している(図6)。ネズミはちょうどその行間による時間の経過のうちに草原にやって来て、大男の手のひらをベッドと間違え、勝手にそこで一休み

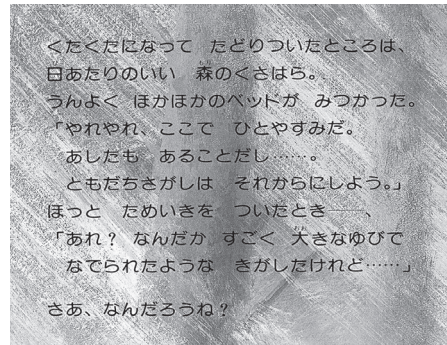


図5 ネズミの話の第六見開きの文章

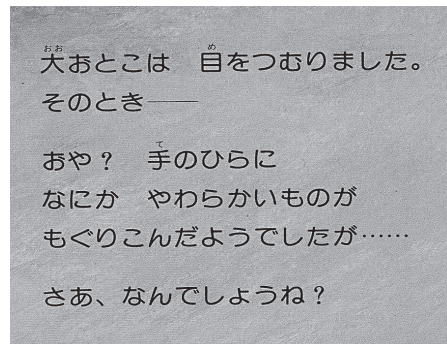


図6 大男の話の第六見開きの文章

をする。また、この時間の経過はネズミの物語の第六見開きでも「異時同図」の手法として描かれている。ネズミは見開きの左下のところ、やや真ん中のところ、または右下のところで色々な動物に出会う。一方、大男の物語の第六見開きでは大男の姿がただ一つで描かれているため、大男の時間の経過はネズミの時間の経過より短く見られるのだ。したがって、草原に着く時間は大男が「前」で、ネズミは「後」となり、二人の「前後関係」が表され、視覚的な「平行時間軸」における時間の「前後関係」も明確に仕上げられている。

以上のように、この絵本における二つの物語は第一見開きから第四見開きまでが二人の過去の生活の断片であり、「時間軸」の連続性がないため、内容的な「並行関係」が認識されるが、視覚的な「平行関係」が認識されていない。ところが、大男の物語の第五見開きではクロウタドリと挨拶しようとする姿が描かれ、第六見開きでは大男が顔を覆いながら、草原の方に走っている姿が描かれている。第五見開きの文章「クロウタドリは、バルトロが／ちよつと／あいさつしようとしただけなのに、たまごを／とられるとおもって／ふるえあがっていました。すると／大男は、目をつつかれると／おもいこみ、かおを／おおって、にげだしました。」によると、第六見開きで描かれている場面は第五見開きの続きである。また、第六見開きの文章の「たどりついたところは／森のくさはら。(後略)」によると、第七見開きは第六見開きの続きである。それゆえ、第五見開きから第七見開きまでは生活の断片ではなく、連続的な出

来事であり、一つの時間軸が創りだされたのだ。一方、ネズミの第五見開きではネズミが友達探し旅に出る姿が描かれ、第六見開きでは途中と色々な動物に出会う場面が描かれているため、二つの見開きの関係も接している。また、第六見開きの右上の文章の「くたくたになって／たどりついたところは、日あたりのいい／森のくさはら。(後略)」によると、第七見開きも第六見開きの続きである。このときから第七見開きまでは内容的な「並行関係」が成立していると同時に、主人公の二人の時間軸の視覚的な「平行関係」も認識されているのだ。二つの物語の「時間軸」の構造は次図7のようになる。

(三) 絵本の時間軸と読者の時間軸の関係

時間軸の「平行関係」あるいは「並行関係」を認識するため、読書という行動の中で読者は「参加者」や「観察者」、「思考者」などの様々な立場となり、時として立場を転換する。この絵本の場合、読者が読む過程では二つの立場をとることが見られる。一つは思考者として、絵本に対する全体的な認識をする立場である。もう一つは参加者として、絵本に対する局所的な認識をする立場である。ここでは、まず大男の物語を先に読むと仮定し、読者の時間軸と絵本の時間軸の関係を説明する。

① 思考者として——全体的な認識

読者は大男の物語を読み切り、ネズミの物語に入ると、大男の物語の内容は一つの経験になった。ここではこの経験を内容的な経験と呼ぶことにする。また、その場で視覚的な一つの時間軸もその内容的な経験に含まれ、ここではこの時間軸を視覚的な経験と呼ぶことにする。読者はネズミの物語を読み進めるに従って、大男の内容的な経験が蘇り、第四見開きを読みみると、二つの物語はそこまでの内容が呼応していることに気づき始める。しかし、そこまでは連続的な「時間軸」が現れていないため、読み手の時間軸との関係がまだ発生されていない。第五見開きに入ると、ネズミの物語の連続的な時間軸が現れ、その上、大男の物語による視覚的な経験との呼応性も現れてきた。したがって、読者はそこで二つの物語の視覚的な「平行関係」を認識することができる。さらに、終わりまで読んでいくうちに、読者は既に視覚的な経験になっている大男の物語の第五見開きから第七見開きまでにおける「時間軸」を次第に思い出

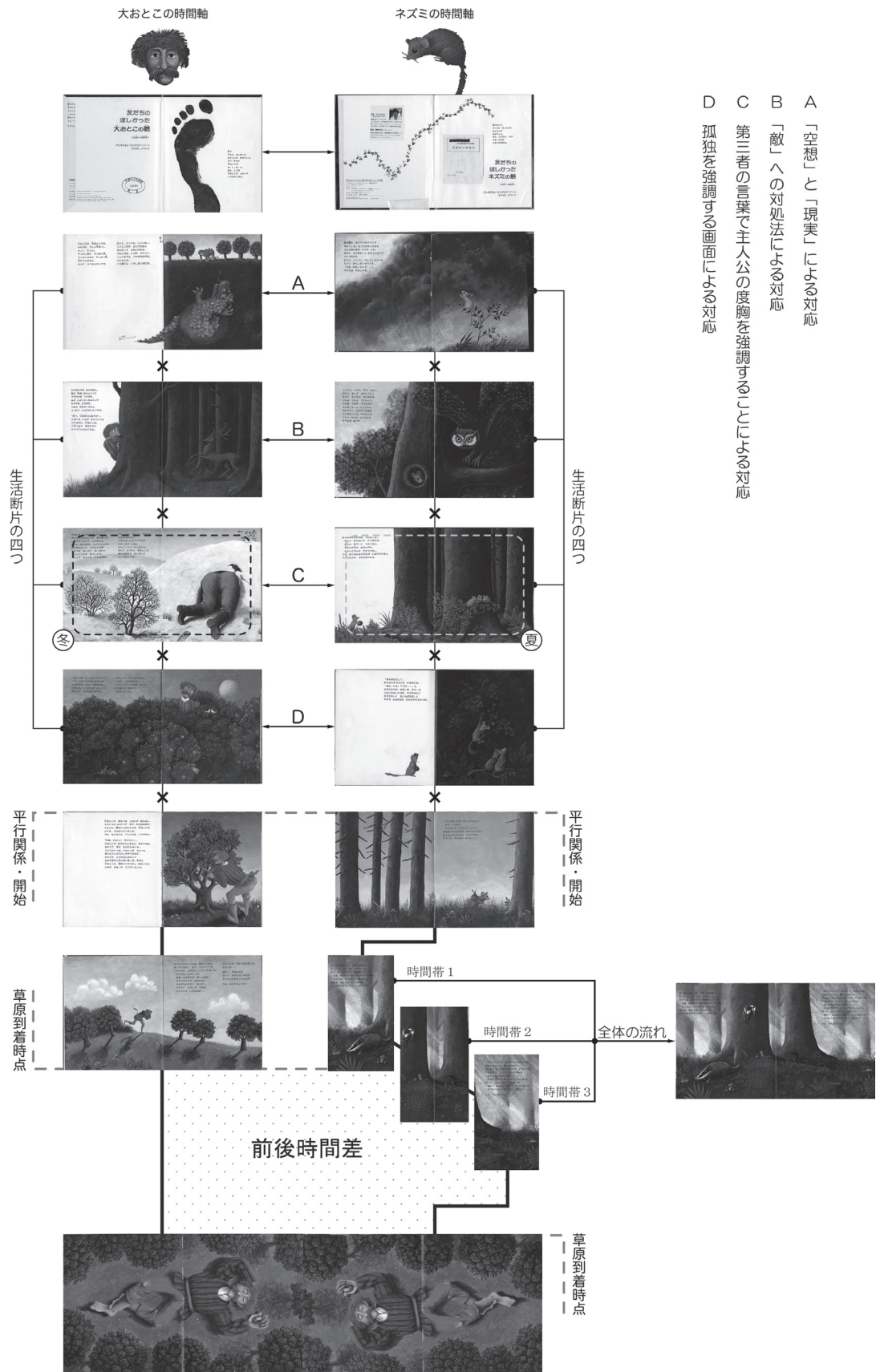


図7 絵本の時間軸と読者の時間軸の関係―全体的な認識

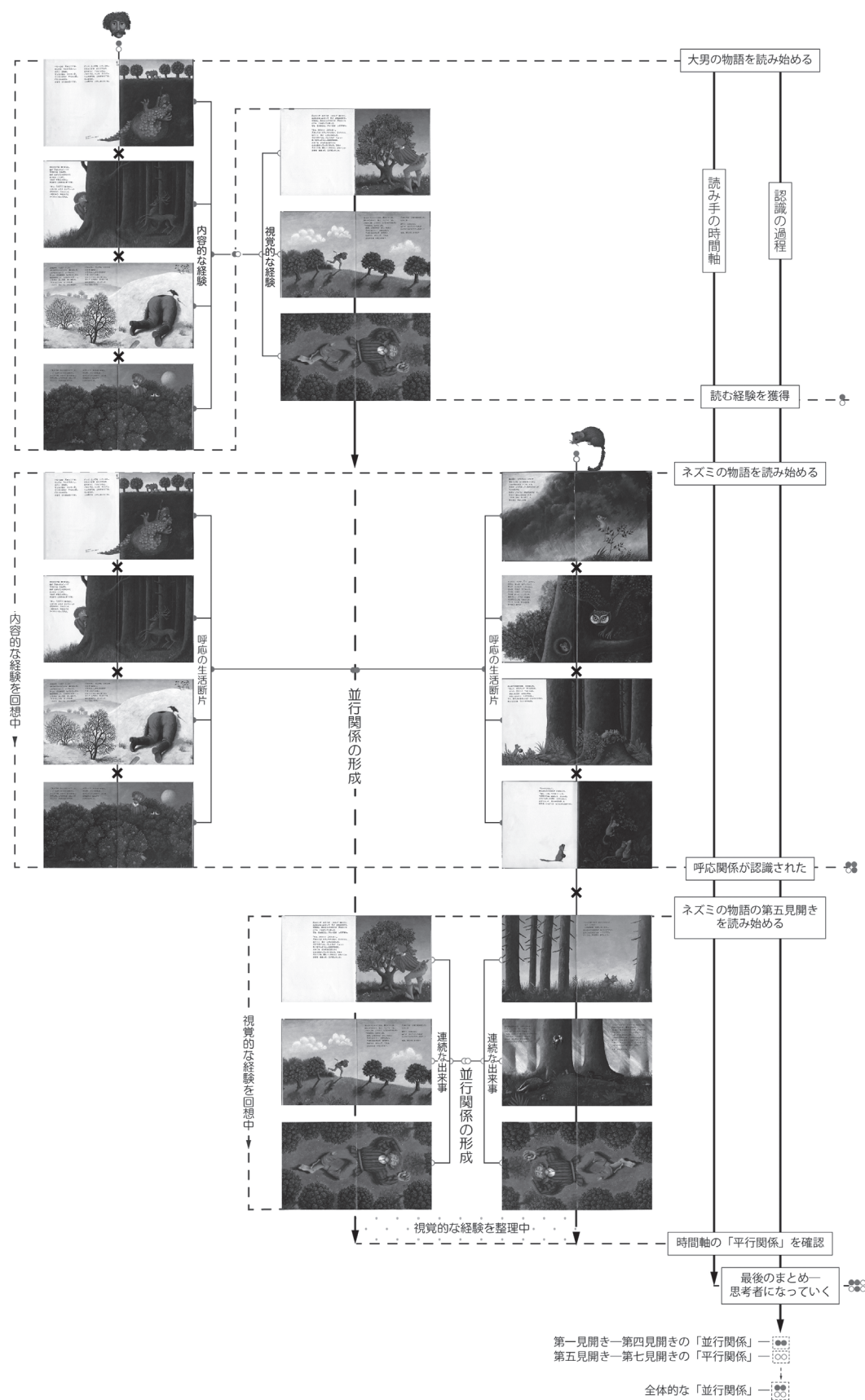


図8 絵本時間軸と読者時間軸の関係—全体的な認識

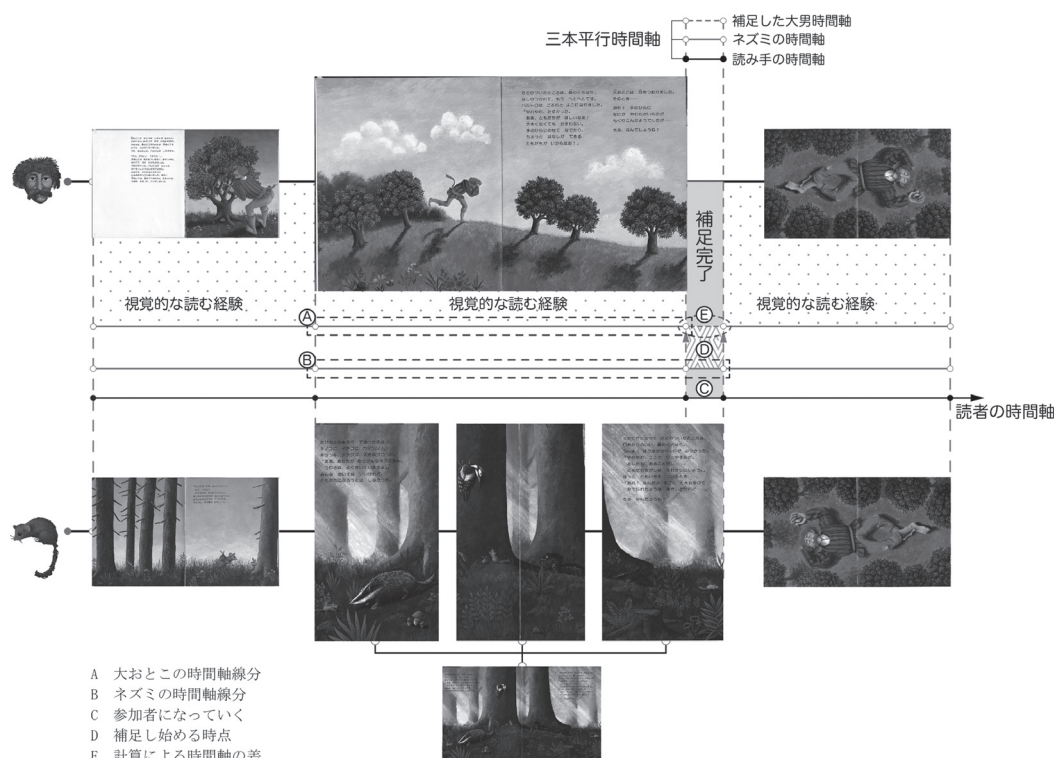


図9 絵本の時間軸と読者の時間軸の関係—局所的な認識（大男の話を先に読む場合）

し、絵本を読み切ると、二つの物語の視覚的な「平行時間軸」が認識できるようになった。この場合、読者は自分の読む経験を用い、一人の思考者として二つの物語の時間軸の関係を判断していく。（図8）

一方、もしネズミの物語を先に読むことにしたら、読み手も以上のような行為をし、最後に二つの物語の時間軸の関係を判断していく。しかし、読む順番によって、一つの差異が現れている。それは、読み手が最後に二つの物語の時間軸の関係を判断する基準として使用している参照物の差異である。大男の物語を先に読む場合は、絵本を読みきると、二つ物語の「平行関係」が成立しているかどうかを判断できるのが視覚的な経験になっている大男の時間軸で、その場で大男の物語の時間軸が参照物になっている。同じように、もし読み手がネズミの物語を先に読むことにしたら、状況が逆になり、二つの物語の「平行関係」を判断する基準として使用している参照物はネズミの時間軸であるのだ。

以上のように、全体的に見ると、読み手は絵本の二つの表紙のどちらから読み始めたかにかかわらず、最後まで同じ思考という行為が行われているのだ。それゆえ、全体的に見れば、読み手は思考者になり、絵本における二つの物語の第五見開きから第七見開きまでにおける二つ時間軸の関係を判断していく。

②参加者として—局所的な認識

第五見開きから第七見開きまでは連続的な時間軸が見られるため、幾何学的な一つの直線が出来上がった。それに、読者はネズミの話の第五見開きに入ると、同じように、ネズミの時間軸を表す一本の直線も現れた。もし二つの物語の第六見開きの初めと終わりを二つの点で示すと、幾何学的な二つの長さの異なる線分が見られる。草原に到着する時間差があるため、ネズミの線分は大男のほうより長く、一つの「隙間」が現れた。さらにネズミの物語を読み続け、最後の場面に着くと、二本の平行している直線が完全に作り出されているが、「隙間」のせいで、大男の時間軸を表す視覚的な直線が途中で断裂された。しかし、読者は二つの時間軸の直線を同じ長さとして認識しようとするため、その場で無意識に線分の数学的な計算結果、即ち線分の差でその「隙間」を埋めるという行為が行われた。したがって、読み手はその場で現在のネズミの「時間軸」を素材として過去の大男の「時間軸」を補足し、同時に読み手の時間軸

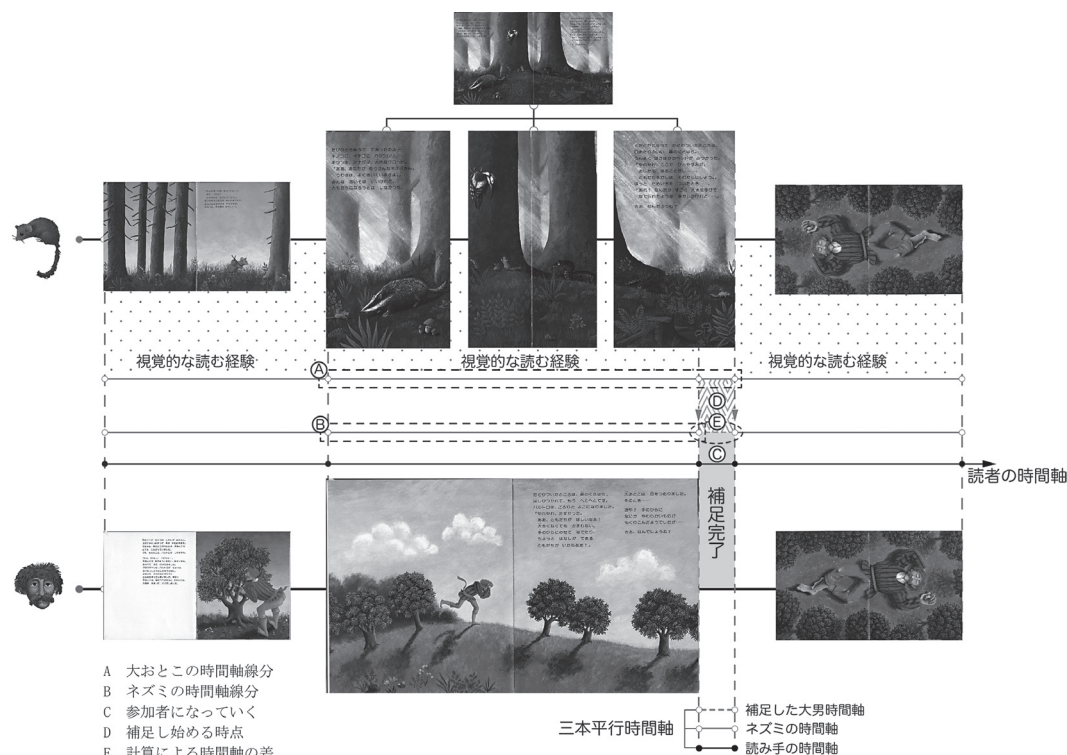


図 10 絵本の時間軸と読者の時間軸の関係—局所的な認識（ネズミの話を先に読む場合）

もその場で他の二つの時間軸と「平行関係」を形成する。それゆえ、第六見開きでは読者が参加者になっていく。

一方、もし読者がネズミの物語を先に読むとしても、読む経験となる時間軸の素材が違っただけである。大男の物語を先に読む場合は、第六見開きでは読み手が現在の「時間軸」を素材として、読む経験になった過去の「時間軸」を完成させるが、この場合は読み手が過去の時間軸を素材として使うことになる。

おわりに

事例の分析によって、今後の研究手法が明確になった。絵本におけるこのような「時空間」の表現について、他の種類もあるが、本稿では扱えなかった。別の機会のための課題としておきたい。他方、異なるメディアにおける類似表現も一つの研究課題として探っていきたい。

註

- (1) *Relative State Formulation of Quantum Theory*. Hugh Everett III, Rev. Mod. Phys. 29, 454-462, 1957
- (2) フックスフーバー作 高橋洋子訳『友だちのほしかった大おこの話+友だちのほしかったネズミの話』（偕成社、一九八六年）
- (3) 『広辞苑』第五版（岩波書店、一九九八年）
- (4) 『広辞苑』前掲書
- (5) 『広辞苑』第六版（岩波書店、二〇〇八年）
- (6) 『広辞苑』前掲書
- (7) 『角川類語新辞典』（株式会社角川書店、一九九三年）
- (8) 『広辞苑』第五版（岩波書店、一九九八年）
- (9) 異時同図法とは、異なる時間を一つの構図の中に描き込むことである。ここでは、背景を同じくする一面面に主役が重複して登場し、連続した動作を表現するものに限定して考察する。有名な「捨身飼虎図」は、この形を代表する作品である。（後略）、「異時同図—動きをみる」『生命誌ジャーナル』、二〇〇五年秋号

参考文献

- (1) 中川素子、今井良郎、笹本純『絵本の視覚表現―そのひろがりとはたらき』（日本エディタースクール出版部、二〇〇二年）
- (2) マリア・ニコラエヴァ、キャロル・スコット著、川端有子、南隆太訳『絵の力学』（玉川大学出版部二〇一一年）
- (3) 藤本朝巳『絵本のしくみを考える』（日本エディタースクール出版部、二〇〇七年）
- (4) 谷本誠剛、灰島かり編集『絵本のひらき―現代絵本の研究』（人文書院、二〇〇六年）
- (5) 中川素子「絵本の表現構造」『絵本学』第五号、絵本学会『絵本学』編集委員会（二〇〇三年）

The Parallel Universe Structures of Expression in Picture Books *An analyze on RIESEN GESCHICHTE + MAUSE MÄRCHEN*

ZHAO Zhengyi

During a long time, picture books have been an object of study in the field such as child care, Children's Literature and Child Psychology. But the writer in this paper is supposed to regard picture books as an object of study in the field of art. With the development of Modern Art, great changes have taken place in the performance of space-time sense existing in the works of art. This influence also spread to the artistic performance of space-time in Modern picture books which make use of not only artistic theory but also the theories of science, philosophy and psychology widely. In this paper, the writer is going to focus on the performance of "time" in the picture books and attempted to import the concept of "Parallel Universe" which can be considerate as a new understanding to that.

Parallel Universe in Physics is continuously employed which was proposed by 1957 and did not been testified by now. Parallel Universe is usually used to demonstrate that the different process of an event or the development of different decision exist in Parallel Universe, in another way — there is somebody just like a clone of myself who is also living at somewhere in the same universe but the different time-line. However I just can't see him or her with my bare eyes. If we think like this way, the position which is so-called "centrality" or "supremacy" is suddenly being deprived from the mankind. Therefore we could see the world through a more objective way.

In this paper, the writer is going to use this point of view to analyze a picture book titled *RIESEN GESCHICHTE + MAUSE MÄRCHEN* which is written by Anneget Fuchshuber in 1983. It is a good example in the research of the writer for the reason that two parallel story which can be also considerate as two parallel time-lines has been expressed in an impressive way in this picture book simultaneously. First, the writer is going to redefine the term which are going to be used in this research. After that, the writer will use the "method" that has been mentioned in the earlier discussion to analyze the construction of the two time-lines to find out the relation of them. Third, the particularity in the process of reading a picture book — "the page turning" has been found as a unique point which is that

"time" can be given birth when we are doing that. So the reader also can be considerate as a part of the picture book. To understand the detail of the story or the construction of plural time-line, the reader's plural identity or the shift of the identity can also be seen in the same time. Therefore, the writer will also take that as a proposition and discuss it in this paper.

Detailed classification of different performance of the time-line of Parallel Universe in picture books is expected to be made in the writer's further researches which also include the function of the word in picture books and compare the similar performance among the different media such as movie and literature.